

世界トップレベルの女子ハンドボール競技における セットアタックで用いられる有効なドリブルプレー

瀧川 璃紗 (201911917、ハンドボールコーチング論)

指導教員：曾田 宏、山田 永子、藤本 元

キーワード：移動、ピヴォット、1対1

【目的】

ハンドボールにおけるドリブルは、シュートプレーに付随した個人技術として研究されてきたものの、ドリブルがアタックパフォーマンスに与える影響は明らかにされていない。そこで本研究ではドリブルプレーの実態を調査するとともに、有効なドリブルプレーについて検討することを目的とする。またドリブルの有効な使い方を考察し、自身のプレーに生かすとともに実践現場に有用な知見を提供することを目的とする。

【方法】

2020 東京オリンピック女子決勝トーナメント8試合を対象に数的同数のセットアタックで用いられたドリブルプレー、計 875 シーンを分析対象とした。

ドリブルの実態を明らかにする分析項目は、ドリブルが使われた位置、ドリブルを使ったプレーヤーのポジション、ドリブルでのゾーン移動の有無、ドリブルを使う前の歩数、ドリブルが使われたアタック局面（ステージ1、ステージ2）、ドリブルのバウンド回数、ドリブルを使ったコンビネーションプレー（パラレル、クロス、ピヴォットとの縦、1対1での個人プレー）、ドリブルの連続性の有無の8項目であった。また有効なドリブルプレーを明らかにする分析項目は、アタック局面の展開（局面が進行、とどまる、後退）、ドリブル終了後のプレー結果（シュート、パス、アシストパス、ミス、フリースロー、7mスロー獲得）の2項目であった。

ドリブルプレーの実態を明らかにする8項目と有効性を明らかにする2項目との間でクロス集計し、カイ²乗検定と残差分析を行った。有意水準は5%で判断した。

【結果】

(1) アタック局面の展開とドリブルプレーとの関係

アタック局面が進行する有効なドリブルプレーは、ゾーン移動があったドリブルプレー ($\chi^2=9.952$)、ステージ2でのドリブルプレー ($\chi^2=320.509$)、ピヴォットとの縦のコンビネーションでのドリブルプレー ($\chi^2=977.882$)、連続性がないドリブルプレー ($\chi^2=83.301$) であった。

(2) プレー結果とドリブルプレーとの関係

シュート、アシストパス、7mスロー獲得につながる有効なドリブルプレーは、センターバックとライトバックによるドリブルプレー ($\chi^2=54.434$)、ゾーン移動があったドリブルプレー ($\chi^2=11.603$)、ステージ2でのドリブルプレー ($\chi^2=497.765$)、ピヴォットとの縦のコンビネーションと個人プレーにおけるドリブルプレー ($\chi^2=1558.707$)、連続性がないドリブルプレー ($\chi^2=103.197$) であった。

【考察】

本研究ではゾーン移動するドリブルプレーは有効であることが認められた。これは、ドリブルでの縦、横、斜めへの移動によって相手ディフェンダーとの対峙において、得意なタイミングや距離をつくることができ、同時にディフェンダーを動かすことができるためであると考えられる。またピヴォットとの縦のコンビネーションにおけるドリブルプレーも有効であることが認められた。このコンビネーションは、ピヴォットがディフェンダーよりも有利な位置を取り、ボール保持者がそこにアシストパスを出すことによって成立するが、ボール保持者はドリブルによって時間的、空間的に様々な状況をつくり出せることが有効なプレーになる理由であると考えられる。さらに1対1での個人プレーにおけるドリブルは、ディフェンダーに阻止されるリスクは高いものの、ドリブルによって対峙するディフェンダーと時間的、空間的調整を図ることができ、それがシュート達成につながると考えられる。

つまり、ディフェンダーのいないスペースに移動したり、状況判断をしながら味方と合わせたり、ディフェンダーを動かしたりできるドリブルプレーがセットアタックで用いられる有効なドリブルプレーであると考えられる。

そのような、状況を判断しつつ行うドリブルプレーのスキルの習得が競技力を高めるために重要であると実践現場へ提言できる。